

# 南方（仏印）

## 北部仏印国境

### ソクジャン市脱出記

長野県 有賀次男

私の家族は、両親、兄、私、弟、妹二人の七人で農業です。

私は昭和十七（一九四二）年徴集兵で甲種合格でした。松本の歩兵第五十連隊第二大隊第五中队に昭和十八年四月一日に入隊しました。

一期の検閲の終わった七月二十四日、南支派遣となり宇品出航、途中、台湾に寄港、約一カ月の航行の末、南部仏印のサイゴンに到着、南方派遣

第二十一師団（討）歩兵第六十二連隊第二大隊第五中队（神田中尉）に編入されました。ビンエンに兵舎があり、ここで二期の検閲を受け、擲弾筒の筒手を命ぜられました。

そのうち「明号作戦」に参加、約一週間の戦闘で仏印軍が降伏、警備に従事中、中国国境付近の地元住民が反日的ゲリラ（いわゆる「ベトミン」）となり、このため越盟党剿共作戦が終戦近くまで約二年半続けられました。

大隊本部はカオバン、中队主力はヌックハイ、第二小队（高橋少尉）は中国との国境ソクジャン、ソクジャンはカオバンから四五キロの地点です。

中隊主力の駐留していたヌックハイから、中国との国境ソクジャンまでを第二小隊が警備するよう命令を受け、ソクジャンに向かいました。途中ベトミン（越盟党）と交戦し、敵の陣地に突入、それを確保しました。

中国との国境最前線での警備に当たりました。その地形は五十メートル位の台地のようなジャングルの山である。頂上の中央に小さな兵舎があり、国境に向けてトーチカと望楼が二カ所位あったと思う。また二十メートル四方ぐらいの庭がありました。一方、中国側には八十メートル位の低い山があり、山の上には塹壕が掘ってあるらしく、監視兵が交替で勤務に当たっている模様である。

我々が外に出ると姿を見つけ、時々鉄砲を撃つてきました。こちらの山とあちらの山の間を河幅五十メートル位の広い川が、青色を淀ませながら轟々と流れていました。

昭和二十年八月十四日の払暁、突如、中国軍が一斉攻撃を仕向けてきたことが、きつかけとなり、陣地を奪取したり、されたりとの激戦がしばらく続けられました。

しかし最終的には我々が陣地の奪取に成功しました。八月十五日の夜半も二回目の夜襲を受けましたが激戦の結果敵を撃退し勝利をおさめた。このように終戦の通知は全く無いまま、戦いを続けていたのです。敵からも戦争が終わったことを知らせる兆候は全く無かったです。敵は我が陣地内に突入してきて毛布などを持ち去った。

激戦数時間の後、撃退したが、我々はソクジャンを死守する覚悟でした。そのためには増援部隊の要請が必要でした。

川村曹長と細川軍曹の二人が連絡を命じられました。連絡に行く途中、ソクジャン陣地撤収命令伝達のため前進してきた中隊主力と出会いました。その時中隊と交戦していたベトミンの銃弾に当たり細川軍曹が戦死しました。そのため水本軍

曹が代わりに加わりソクジャンに向かう、その途中また水本軍曹が戦死しました。川村曹長は単身よく大任を果たし高橋小隊全滅の危機を救ったのでした。

夜間を期して撤退せよとの連絡を受けて翌未明、脱出の計画に移りました。その晩は、特に暗闇の夜だったような気がする。陣地脱出を敵に察知されると追撃される心配があるので、あくまでも陣地には人がいるように見せかけなければならなかったのです。

北部仏印は米作地帯で、しかも年に二回も取れ、食糧は恵まれていました。また竹が多い地帯でもあったので、竹林に入ると枯れた竹の葉が絶好の炊飯用の焚物になりました。

早速、脱出にはまず握飯を作れと、皆から有るだけの米を出してもらい、枯れた竹の葉に火をつけて一気に飯を炊き上げ、握り飯を作り上げました。全員の飯盒には炊きたての米飯が詰まりました。

た。そして兵器と弾薬の整備と、立つ鳥跡を濁さずの譬え通りに陣地内外の整理整頓を実施しました。

また携行品は最小限度とすることとし、伐った薪を陣地の庭に積んで赤々と燃やしました。衣料品とか不用品もすべて一緒に焼却しました。敵は安心してはいるようです。背負い袋、兵器、弾薬、残った米、天幕などを携行し、いよいよ脱出開始です。

全員無言。一言もしゃべる者はいない。三方を包囲されている。残るのは裏のジャングル地帯だけです。ジャングルの下は断崖。その下は国境を流れる川が轟々と流れ、深さのわからぬ河です。渦を巻きながら真青に淀む淵、敵もまさかここから脱出するとは思わないだろう。ジャングルの樹につかまり、崖で木のない所は藪や草につかまり、爪先で足を掛ける穴を掘りながら進みましました。川で迷ったら水の流れに沿って下れと教育されていた通り川下へと進みました。

川に沿って道路があるのですが、敵性住民のみにだけに、道路は長い距離にわたって路傍の大木が切り倒されて遮断され、河に架る橋は全部きれいに落とされて渡れず、後退は河に沿って下るしか策は残されておりませんでした。

河を渡る時は兵器、弾薬、装具を頭上に乗せ、浅瀬を探しながら足さぐりでノロノロ進むのですが、河には必ず深みがあり、うっかり落ちると足を取られ、頭には重い物が乗っているので転倒して流される者が出てくる始末です。非常に苦しい脱出行でした。

背負い袋は重い、弾薬は背中と腰に付けている。一歩間違えば重い体が淵の中へまっ逆様、夜の暗闇の中で皆無言で慎重に慎重にと下って行く。早くしないと夜が明けてしまう。皆気が気ではなかったのです。横に進んでようやく水の浅い所へ降り立つことができました。俺は生きていたんだ。皆ホッとした様子でした。この安堵した時の気持ちは今でも忘れられない。

この日から毎日が死闘の連続になろうとは。昼間はジャングルの中に潜み寝て、夜になると次の地点に歩行前進する。その間敵と撃ち合うこともしばしばで、落とされて橋のない川を渡り、さらに川沿いの湿地帯を歩く。

山を越えて衣服も靴もボロボロ。編上靴は踵がはがれてブカブカになり、巻脚絆を解いて靴を縛りつけて歩く始末でした。兵の中にはマラリアと日射病で歩けなくなる者が出てきました。大きな樹の蔭に寝かせて胸をはだけて冷してやり、夜のうちに体力が回復するように介抱してやりました。荷物は他の者が担ぎ、なんとしても中隊に辿り着くまではと、一同が前へ前へと歩き続けました。

九月十日、ようやく中隊本部と合流することができました。一日遅れたら置き去りになるところでした。とても嬉しかったものです。この生きられた喜びは今でも忘れられない。そして何物にも

耐え抜く事のできる肉体と精神力が養われたことは事実である。

途中戦没者三十二人を出した脱出行の苦難は、今でも尊い思い出である。

昭和二十一年四月二十二日、浦賀に帰り、二十四日自宅に帰りました。両親や妹は皆健在でしたが兄の姿が見えません。私の入営後、間もなく召集が来て、まだ帰らないとの事でしたが、私の帰宅後しばらくしてボルネオで戦死したと公報が届きました。

終戦を知らずに約一カ月前線で戦い続け、脱出の死線を潜り抜けた経験を糧にして今後の人生を生きたいと思います。